

【氏名】葛西 映吏子

【所属】（助成決定時）

関西学院大学大学院 社会学研究科

【研究題目】

国際援助とローカルな知の再編に関する研究

－激動化するネパール社会における介入と日常生活－

【研究の目的】

本研究は、流動化するネパール社会において、国際社会の援助や介入がどのようになされ、どのような形で社会が復興をとげるのかを、地域社会の小さなコミュニティと個々人の日常生活に焦点をあてて明らかにすることを目的としている。

240年間続いた王制が崩壊し、ネパール社会は今大きく変容をとげようとしている。民主化と近代化、それにとまなう生活の合理化が一気に押し寄せているといえるだろう。こうした流動化する社会において、国際社会がさまざまな形で介入している。本研究においては、国家システムの再構築というマクロな視点でみた復興だけでなく、ミクロな視点からとらえた復興と開発、文化や知の再編がいかに行われるのか、ネパール社会に生きる人々のコミュニティとネットワークの変容と再編について検討し、21世紀のアジアにおける援助のあり方、介入のあり方のあるべき方向性についても考察する。

【研究の内容・方法】

ネパールの首都カトマンズ付近の古都に約1年間滞在（ホームステイ）してフィールドワークを行った。滞在期間中に言語（ネパール語）を習得し、具体的には都市文化を築いたネワール族の年中行事、祭り、儀礼についての調査・文献収集を行い、政治的経済的に大きく変容しつつある社会において、「伝統的」といわれる祭り／儀礼がいかに行われているのか、どのように変化しつつあるのかを参与観察および聞き取り調査によってデータ収集を行った。その際、近代化合理化の過程においてはこうした五感の大きな変容がおこるであろうとの見解から、収集した資料を使ってのインタビューや映像撮影なども行い、「色」「音」「におい」「味」「感触」といった五感を取り込んだ調査になるよう留意した。

祭りを運営するのは、ネパール語で「グティ」と呼ばれる、地域コミュニティよりも小さな互助組織である。無数にあるこうしたミクロレベルでの互助組織の現状と機能に着目することによって、国家としてのシステム構築・復興のレベルではとらえることのできない生活レベルでの「復興」を把握することを目指した。

調査期間中にも、次回の調査に反映させることを目的とし、カウンターパートとしてあげたネパール環境文化研究センター（Necri）のメンバーとのディスカッションを随時行った。

文献の収集についてはカトマンズにある National Library やトリブバン大学の図書館、研究書を扱う書店などを利用した。

【結論・考察】

60以上もの民族が存在するといわれるネパール社会において、西暦2008年は非常に大きく社会が転換した時期であった。ヒンドゥ国家の解体という大文字の歴史のもとに、水牛

や鶏の犠牲をともなう儀礼への「嫌悪」の意識の発生、生活の近代化／個人化などにより、「グティ」という互助組織は変容・解体のさなかにあった。それにともなって、多くの祭祀が縮小・消滅の危機に瀕しており、こうした変化は、一日／一年／一生の儀礼とともにあったネワール民族の生活環境を大きく再編しつつあることが明らかになった。これは、生活のなかのマイクロレベルでの変化、「浄一不浄」に対する観念が急速に変容してきていることによるものが大きいと考えられる。

政府の再建の時期にある今、ネパール社会では、自民族の文化・権利を主張する一方で、文化消滅の危機にさらされているのである。国際社会の介入や援助がもたらす影響もまた、これらの独自の「伝統的」文化や環境との関わり方を変える可能性があることに十分留意する必要があるだろう。

なお、小さなコミュニティとしての「グティ」の機能および祭祀の変容については、今後も追加調査を行う予定である。こうした小さなコミュニティレベルでの祭祀に関する資料は、文字化されていないことが多く、口述資料として蓄積することも引き続き行いたいと考えている。